

第 5 回検討会における主な御意見

令和 2 年 11 月 24 日
農村振興局

MAFF

Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries

農林水産省

目 次

- A . 施策検討対象の整理 1
- B . 農村地域における所得と雇用機会の確保に向けた支援の在り方 . . . 3
- C . 農業と様々な仕事を組み合わせた暮らしに関するアンケート 6

農村における所得と雇用の確保に関する主な御意見

A. 施策検討対象の整理	
事 項	御意見
(1) 検討の目的	<p>○基本計画の農村政策の中で「しごと」はトップ項目に入っており、産業政策と地域政策とのつながり、すなわち車の両輪の車軸の部分をどうつなぐのかということも含めて重要である。(小田切座長)</p> <p>○農村全体の所得増加、農業所得の増加、農業を通じた地域振興などの前提条件によって、だいぶ議論が変わってくるので、整理して討議できるとよい。(谷中委員)</p> <p>○農業のしびりなく農村全体のビジネスを活性化させる方策を考えた方が、農村における税収の増加を実現できる可能性は高くなる。農業をベースに考えるのであれば、農業ベースで多様な働き方を議論することになるが、地域外の力も活用して農村における経済的なインパクトを考えるほうが打ち手が多いと実感している。(谷中委員)</p> <p>○半農半Xの施策の目的を、産業振興、地域振興のどちらに置くかによって、展開の仕方が変わる。いずれかの目的に特化するのか、両方の目的を狙うのか、その他あらゆる目的をカバーしていきたいのかという問は極めて重要。(谷中委員)</p> <p>○コロナで東京の人たちの暮らしが変わっていて、今までは、付加価値を付けて売る先が東京だったが、東京との関係性も変わるかもしれない。東京から離れる人たちも今増えていて、農村の懐の深さや吸収力など、稼ぐ以外の要素も議論に入れていくと地域全体の価値が上がり、人が生きることと直結した農村といえるのではないか。(前神委員)</p>
(2) 施策検討対象の類型化	<p>○個人と経営体のどちらにも焦点を当てるのか、マルチワーク先となる経営体や農業に参入する経営体などの地域の様々なプレイヤーにも焦点を当てるのか、といった点を整理してほしい。(平井委員)</p> <p>○農業＝自営だけでなく、雇われて農業をしている者も含めて議論した方が半農半Xは魅力的。(若菜委員)</p> <p>○きらきらしただけの人が農村の現場にいるわけではなく、きらきらしていない人たちが実は支えているんだという声に応えていくのも必要。例えば、ローカルのプロスポーツのプレイヤーは地域の農業部門で働いている。自動車整備工も非常に重要な存在。こうした地域内経済の在り方も見ながらマルチワークの組立てを念頭に置いてはどうか。(平井委員)</p> <p>○定年した人が新たに農業を始めて農産物を直売所に出荷し、その収入と年金を合わせて生活する「年金プラス就農」も現実的な半農半Xではないか。JAの営農指導員や生活指導員が具体的な情報を伝え、そういう流れで農業にチャレンジする方が多い。地域で定年退職や早期退職の方が新たに小規模から始め、大規模へと転換していった方もいる。(川井委員)</p>

	<p>○農村の所得を極大化、拡大していくという話も、基本的にはそのとおりだとは思いますが、収益がどこに落ちていくのかは考えた方がよい。農村の経済規模が拡大しても、分配される所得が外部に落ちていくことも現実にはある。(平井委員)</p> <p>○類型化については、赤と青の棒グラフが出てくる程度なので、谷中委員が指摘したようなタイプ、アンケートに回答いただいたようなタイプ、自給野菜的農業のタイプなど、いろいろ出てくると思うので、類型化に挑戦してほしい。(小田切座長)</p> <p>○農業も含めたマルチワーク型の議論は、農林水産省としてはあまり慣れていない課題であり、今回いろいろなことを広げて議論したが、次に必要になるのはまとめるプロセス。まずは、いろいろなタイプがある半農半Xを類型化することで、次に、ターゲットングをしてその問題点を明らかにするプロセスに進むことができると思う。(小田切座長)</p>
(3) 支出の扱い	○半農半Xで農業所得を上げようとしているが、年金、教育費など、むしろ引かれるお金の方が重要。(若菜委員)
(4) 検討の優先順位	○人口減少を含めて待ったなし感がある。自営型の受皿をどうするかなどいくつか重要な論点があるので、ある程度優先順位、ターゲットを絞って議論した方がよい。(平井委員)

B. 農村における所得と雇用機会の確保に向けた支援の在り方	
事 項	御意見
(1) 自営（農業）への支援の在り方	<p>○複合のモデルを収集して提示する際、現実には試行錯誤の連続なので、どう変遷していったのかをプロセスで整理してほしい。（平井委員）</p> <p>○U・Iターンの方は農村に夢を持ってくるので、自分はこれを作りたいという希望を持っていて、JAや直売所に相談に来るが、地域で求められているものとずれていたりする。そこで、それをうまく「売れるもの作り」に誘導することも、当人のその後の生活にとって大切なことで、JAの営農指導員などがその役割を担っている。（川井委員）</p>
(2) 自営（非農業）への支援の在り方	<p>○特定地域づくり事業協同組合は、派遣労働者となる仕事を創り出すタイプで、自分で様々な複数の仕事を自営していく方々にこのスキームは対象とならない。そういう意味での制度的な穴を埋めることが必要。（小田切座長）</p> <p>○「農村発イノベーション」は本当に的確な言葉であり、これが一つの方法だと感じており、新しい農村の在り方みたいなことの現状の最前線の取組をいち早く社会に発信し、選択肢として提示していくことが大事なのではないか。（指出委員）</p>
(3) 被用者への支援の在り方	<p>○「半X」探しの支援として、人手不足の状況を県が全酒蔵に毎年アンケートを取って情報を各市町村にフィードバックしたりしているが、「半X」探しを市町村がもっと積極的にやってほしいと思っている。（田中課長）</p> <p>○女性が一人で農業を始めたいときに、ハードルを感じないような仕組みが必要。例えば、農業プラスX探しがあると女性も参入しやすいと思う。（前神委員）</p> <p>○コミュニティバスの運転手プラス農業をセットで募集するなど、半XのXができる人を地域から募集する方法もあるのではないか。地域のビジョンを示し、一緒に夢を見てくれる方に「来たれ」と呼びかけるような関わりを示すことに意味があるのではないかという趣旨。（嶋田委員）</p> <p>○協同組合は地域内外の人が参入しやすい仕組みであり、特定地域づくり事業協同組合は地方公務員も副業としてすることが可能というのが大きい。（前神委員）</p> <p>○特定地域づくり事業協同組合や労働者協同組合を活用して若いうちから農業に参入する者が増えると、農業への関わり方の形も広がっていくと思うので、それによってこんなことができる可能性があるということを議論できたらよい。（前神委員）</p> <p>○地域の中のいろいろな仕事をいろいろな人が支えていくようになると、農村全体の産業のいろいろな人との新しい関わりができ、新しくイノベーションが起こると思う。（前神委員）</p>

<p>(4) 事業体への支援の在り方</p>	<p>○特定地域づくり事業協同組合について地元で市町村を促したが、事業体ではないと参加できないし派遣型だということで全然駄目だったが、事例にあるようなイノベーション型の事業体にうちのNPOがなればよいのかと思っている。是非事例なども今後見せてもらえれば、是非実践したい。(若菜委員)</p> <p>○U・Iターンで新たに農業にチャレンジしようとしている人が農業で収入を得られるまでの間の「生活の基盤づくり」が重要。生活が安定するまでの2～3年の間、JAの出資法人などが雇用の受け皿となり、一定程度の収入を確保することが必要であり、出資法人などへの継続的な支援が不可欠。(川井委員)</p>
<p>(5) 地域づくり人材との関係性</p>	<p>○前回まで議論していた人材の話と今回の話を切り離さないでほしい。マルチワーク先の発掘とマッチング、農外からの参入も視野に入れて動いていく人材が重要。地域づくりでは「着火役」とされていたが、もう一つ重要なミッションがあるのではないか。(平井委員)</p> <p>○半農半Xを含め、新しい農業の仕方は、今までどおりの農業をやっている集落の高齢者たちから見ると価値が理解されにくい可能性があるため、そのような多様な価値に対する理解を得るための説明と一緒にしてくれるコーディネーターのような第三者の存在が重要ではないか。(若菜委員)</p>
<p>(6) 国の役割</p>	<p>○農林水産省をはじめ様々な省庁が、農村の活性化について様々な切り口で携わっているので、中央省庁全体にどのような農村経済支援策があるのかという全体像があると、今後政策を考えるときに助かるので、可能であればそのような政策メニューの棚卸しができるとよい。(谷中委員)</p> <p>○総務省・農水省・経産省などが農業や人材をめぐるいろいろな施策を講じているが、省庁横断型で地域に分かりやすい発信をしてほしい。(川井委員)</p> <p>○前回指摘したように、火災報知器型で現場からの相談を受けるシステムづくりが重要であり、農林水産省の出先に地域づくりの悩み事を相談できる窓口を設けてはどうか。(嶋田委員)</p>
<p>(7) 市町村の役割</p>	<p>○半農半Xを担い手の入口と整理している度合いなど、市町村ごとにカラーがある。(田中課長)</p> <p>○地域に人がいなくなってきて危機感が高まっている今、U・Iターンでも地域に根ざす人であれば幅広く受け入れられるようになっている。市町村がしっかり絡むことが大事であるが、市町村も(県の)普及員も減っていく中で、きめ細かい対応が難しくなりつつある。(田中課長)</p> <p>○市町村自らが半農半Xモデルを作って、主体性を持ってもらうことを大事にしており、就農相談会でのプレゼンやお試し体験などをしっかりやっている市町村に人が入っている状況。(田中課長)</p>

<p>(8) 半農半 Xの名称</p>	<p>○最近、ポートフォリオワーカーという自分のやりたい仕事を重ねてやっている人たちが出てきている。農業が好きで、自分のライフワークも重ねてやっていきたい人たちを、例えばポートフォリオファーマーという呼び方で、PFとか略したりするとよいのではないか。(指出委員)</p> <p>○ポートフォリオワーカーはイメージと合っていてよいと思う。(谷中委員)</p>
<p>(9) その他</p>	<p>○全体的な話として、ベストプラクティス的な事例からの学びだけでなく、失敗事例からの学びもお願いしたい。(嶋田委員)</p> <p>○篠山イノベーターズスクールの取組は、半農半Xを進める上で注目に値する。(嶋田委員)</p>

C. 農業と様々な仕事を組み合わせた暮らしに関するアンケート	
事 項	御意見
アンケートについて	<p>○アンケート回答者に加え、新しい農的なライフスタイルの実践者のヒアリング情報もあると、違う視点が実像を伴って出てくるのではないか。(谷中委員)</p> <p>○アンケート結果についてサンプルに偏りがある場合は、例えば四象限を作って質的に分析すると、こういう条件だとこういう声が出るんだと類推でき、そこまで整理できれば重要な知見が出てくると思う。(平井委員)</p> <p>○半農半Xをいつから始めたかによって、価値観が多様になって見えてくるのではないか。また、何年やっているか、場所はどこか、農業のメインの品目は何か(稲作、施設野菜、露地野菜等)といった情報も是非入れてほしい。(若菜委員)</p> <p>○全く新しい農的なライフスタイルを実践しているイノベーターたちは、農水省のウェブにアクセスしてアンケートを答えるタイプとはおよそかけ離れていると感じる。彼らは、農的な資源を編集して、デジタルマーケティングを駆使しながら発信を行い、オウンドメディアを自分で作ってお金を稼ぐ。自分で田んぼや畑を持っているわけではなく、農業に関わる様々な方をつないで商材をつくり、編集して発信したり、農的な資源を紡いでレストランをプロデュースしたりしており、こういう人たちが、すごく農村経済に影響を与えている。サンプルとして抽出していくと、新しいロールモデルとして浮き出てきて、新しい農村政策を考えていく際に参考になると思う。(谷中委員)</p>